

# 『保育士・幼稚園教諭になってよかった』と 感じた瞬間エピソード

## 目次

---

### 保護者などとの関わり・卒園後の姿編

- 1 保育士になって良かったって思う瞬間
- 2 保護者の心のよりどころ
- 3 子どもの笑顔と育ちを保護者や職員等で共有できた時
- 4 ぼくもピアノをはじめたよ！
- 5 再会の喜び



## 1 保育士になって良かったって思う瞬間 (30代)

子どもの成長を感じられた時、その姿を一番近くで見られた時など、保育士になってよかった、楽しい、と思う場面が毎日の生活の中でたくさんあります。その中でもよりやりがいを感じるのは、子どもたちや保護者の皆さんから「担任が先生でよかった」「来年度も先生に見てもらいたい」「先生に相談してよかった」等、嬉しい言葉を頂いた時です。大好きな子どもたちからだけでなく、そのお父さん・お母さん、家族の方からこういった言葉をかけられると、自分の保育が皆に安心を与えることができていることを実感します。そして、更に保育の技術や知識の幅を広げ向上していこうという気持ちになります。

また、卒園して大きくなった子と様々な所で出会ったとき「先生！」と声を掛けてくれることも、大きな喜びの一つです。保育園の行事にも「先生に会いに来たよ」と来園してくれる子もいて、大きくなって“先生”として覚えていてくれるんだと、とても嬉しくなります。

悩むことや大変だなと思うこともたくさんありますが、それ以上にやりがいや楽しさがたくさんある仕事だと思っています。



## 2 保護者の心のよりどころ (20代)

私が保育教諭になってよかったと思う瞬間は、保護者の方の心のよりどころとなり一緒に子どもの成長を喜び合えた瞬間です。保護者の方の信頼を築くというのは子どもたちを担任するうえで大切なことだと思っており、信頼関係は子どもの成長と同じ日々の積み重ねだと思っています。私のクラスにいるKちゃんのお母さんは初め園での様子を「今日はこのようなことができましたよ。こんなことが出来るようになりましたよ。」等、直接話をしても「そうなんですわ。」という返しや、連絡ノートも印鑑のみの返事でした。なかなか信頼関係が築けず、Kちゃんのお家の様子が聞けませんでした。私はどうしたら心を開いてもらえるのかと悩んでいましたが、引き続き園でのKちゃんの成長を伝え、関係を築けるよう努力していました。あるときKちゃんのお母さんが妊婦になったことで不安定になったKちゃん。お母さんから、「先生どうしたらいい？Kちゃん的笑顔が消え母として悲しい。」という相談をしてくれました。家庭でのKちゃんの様子を把握したうえで、こども園でも安心できるような援助をし、園での様子、成長をお母さんに伝えたりしてやりとりをしていったことで、「いつものKちゃんに戻ってきました。こども園大好きと言って楽しみにしています。先生が担任の先生でよかったです。ありがとうございました。」という言葉ももらいました。Kちゃん自身も、何事にも意欲的になり「〇〇が出来たよ。お母さんに言う。」と張り切る姿も見られ、お母さんからも笑顔が見られ、「家でこんなことを頑張っています。」などの話をしてくれるようになりました。お母さんの心のよりどころとなり、成長を共有し一緒に喜び合える関係になることが出来るのは、保育教諭のこの仕事であると強く思いました。そして私自身まだ力不足な部分がたくさんある為これからも保護者に信頼できる保育者となるため努めていきたいと思っています。



### 3 子どもの笑顔と育ちを保護者や職員等で共有できた時 (30代)

私が「なってよかった」と感じる瞬間は、主に2つあります。

1つは、子ども達が笑顔を見せてくれた時です。入園又は進級当初は、泣いている子はもちろん、泣かずに登園している子も誰もが緊張した表情をしています。こちらから関わることで少し表情が崩れることもありますが、硬さは拭えません。それが、日々その子の良さや頑張りを認めたり、時には困り感や葛藤を温かく受け止めたりしながら一緒に生活すると、徐々に心を開いてくれるようになります。遊びの中で「～見つけたよ!」と教えてくれる嬉しそうな笑顔。今までできなかったことができた時の喜んでる顔。読み聞かせの絵本や昨日の出来事等、見たり聞いたりしたことについて話をしている中で、思わずお腹を抱えて笑う顔。いろいろな笑顔がありますが、不安や緊張がとれ、心からの屈託のない笑顔を見せてくれた時、とても嬉しい気持ちになります。

2つめは、子どもの成長を感じ、それを保護者や様々な先生と共有した時です。以前、クラス内に「少し気になる子」がいた時、クラスに関わる職員で、困り感は何か?どのような育ちを目指し、どう支援していくか?を話し合いながら保育に努めました。保護者と連携を密にとったり、スモールステップで同じような願いをもって、そのお子さんと関わるようにしたりしました。できそうな事を具体的に目標にすることで、認められる嬉しさを感じ、喜んで登園するようになりました。保護者の方も、「お休みの日も幼稚園に行きたがるくらい、園が好きになったみたいです。」とその姿を喜び、『喜んで登園する』というその子の成長を共有できた時、とても嬉しかったです。

そして、その子に関わる職員で話し合いをした際、具体的にどの支援がどんな育ちにつながっているかを、行動面・心理面から具体的に教えていただき、育ちの確認・共有と今後の育ちを共通理解した時、「今後も協力し合いながら育ちを支えていこう」と頑張る気持ちになれました。

そして、その子の成長により、クラス内にも変化がありました。今までその子と関わることの少なかった子達が、「ここに並ぶんだよ」と教えてあげたり、「～してえらいね」と些細な事でも認めたり、「どうしたの?」「～が嫌だったの?」と相手の気持ちをわかろうとする優しい気持ちが膨らんできたように感じました。一人の子の育ちがクラス全体としての育ちに繋がったと感じた時、「このクラスの先生でよかったな」と思いました。

保育の仕事は、悩むことも多いですが、一人一人の成長を感じた時、それがクラスとしても成長できた時、そしてその成長が子ども達の満面の笑みと保護者の方の喜びに繋がった時、『なってよかった』と感ずることが出来る素敵な職業だと思います。



#### 4 ぼくもピアノをはじめたよ！ (40代)

私は幼少時代からピアノを習っていた。

いつ頃からか、将来は子どもとかかわる仕事に就きたい、大好きなピアノを弾きながら子どもたちに歌を歌わせたいと思うようになり、幼稚園の先生になった。

この仕事を始めて、早20年が過ぎた。

可愛い教え子たちが立派に成長し、毎年卒園していく。

ある日、昨年度卒園したI君が、弟のお迎えに母親と一緒に園に来た。私は、久しぶりの再会が嬉しくて、「小学校はどう？」「頑張ってる？」などと、いろいろな話をした。

するとI君が嬉しそうに、「先生、ぼくピアノを始めたんだよ！」と言った。幼稚園当時は特別、音楽に興味があった様子はなかったI君。

私とI君のやり取りを後ろで聞いていた母親がこう言った。「A先生がピアノ上手だったから、この子もA先生みたいにピアノが弾けるようになりたいって言って始めたんですよ。」

私は驚いたが、とても嬉しく思った。自分では、思いもしなかったところで、子どもに刺激を与えていたことを知った。これからも幼児教育を通して、子どもたちの憧れの存在である教師でありたいと感じた出来事だった。

#### 5 再会の喜び (40代)

ある休日、一人で買い物をしていると、「先生！」と、突然声を掛けられました。振り向くと親子が笑顔で立っていました。それは、私が初めて保育士になった時のクラスの子でした。その子は、とても子どもらしかったのですが、いたずらな面もあり、保育士になって間もない私は、どう関わっていいか悩んだこともありました。私を覚えていて声を掛けてくれたことも嬉しかったのですが、その子が立派に成長して自分の夢に向かって頑張っていることを知ることができ、自分も頑張ろうとパワーをもらえました。

